

授業研究に参加して

授業研究会担当幹事

東京都立多摩高等学校教諭 大森 忠

平成10年10月24日(土)東京女子学院中学高等学校において、東京理科大学数学教育研究会主催による第6回授業研究会が行われた。対象生徒は中学1年生26名。青野宏康先生による授業である。生徒は至って熱心であり、集中している。それは青野先生の授業内容の豊かさにあることを思わせる。内容は1次関数、座標平面上に点をプロットし、1次関数 $y = ax$ のグラフを描き、グラフの全体像を推測することを目標とするものであった。授業の方法として興味深かったのは、グラフを描かせるために、グループによる学習を行ったことである。グループ学習では一斉授業のように黒板に正解が描かれる前に、生徒同士解答を比べ合うため、ある程度正解が予想できる。他の生徒と比べて自分の描いたものを評価したり、違った手法を見ることで、発展した考え方もできる。授業研究会参観者としては、生徒がいつわかり、いつ間違えたかを時間を追って観察できる。このことは授業指導者の立場よりも、参観者だからこそできる重要なことだと感じた。

ところで、先日、東京理科大学の「1999 大学要覧」が手元に送られてきた。多くの方がご覧になったと思うが、「DATA に見る東京理科大学」という項目に企業人事部からの評価が大学順に掲載されている。「採用したいと思う学生に出会う」「専門的な学問を習得している」「創造性が高い」「大学が教育に熱心」と「総合ランキング」で大学が評価され、どのどの部分でも理科大に対して高い評価が得られていた。事実、私の友人の多くは企業で認められて活躍している。資格を取るために、休みを惜しんで専門書を読み、なんとしてでも資格試験に合格しようと努力を絶やささない。そんな姿勢が卒業をしても理科大生の中に生きている。しっかりと勉強をし、学問を自分のものとして単位を取り修得することが大学時代に身に付いたからだと思う。社会で信頼されているのは、常に努力を絶やさない人間ではないだろうか。

同じ事が教員に対しても言えるのだと思う。研究、努力を絶やさないことが、生徒から支持を受け授業をよりよいものにしていく。生徒に信頼され、想像力

豊かな生徒を社会に送り出す。そのために、生徒にわかりやすい教材を与え、指導方法を研究していくことがいうまでもなく必要である。

本当に自分は努力を怠ってはいないか、授業研究に出席して痛切に考えさせられた。私自身の課題は次の2つである。

1 授業を見つめ直す機会を持つこと。

2 新しい数学指導法とその発展を学びとること。

授業研究で授業を行っているのは、ベテランといわれる先生であり、一般的にみれば、よい授業であることはいうまでもない。しかし、現状に満足せず、授業を行う側も参観する側も問題点を見だし、質問をし、議論を重ねていく。自分の普段行っている授業はどうであるかといえ、現状に満足して、行った授業をほとんど省みることができない。そのまま次の授業に進んでしまったのでは、生徒のつまずきに気づかない。自分を見つめ直す努力を怠っていることになる。

学習指導要領が変わり、内容にも変化する。次期改訂に伴い時数、内容とともに削減される。明らかに小・中・高と学力が1年ずつ落ちてくる。この数学教育にとって危機といわれる中、効率よく授業を展開しなければならない。電卓、計算機の利用やグループ単位での学習活動、少ない講義、知識から多くのことを考えさせるような教材と、指導方法が今必要なのではないかとされている。今回の授業研究会に参加して、新しい授業展開を考え努力することの必要性を思い知らされた。

理数研ではこれからも年2回授業研究会を春と秋に行っていく。若手の教員が参加者に非常に少ないことは多くの先輩が心配されている。生徒の信頼を集め、社会に貢献できる教員を目指すために、自らの向上心を満たすために、是非多くの参加者で会場教室が溢れかえるように、多くの先生方の参加を心待ちにしております。忙しいとって参加できないのはいいわけにすぎない。遊ぶ時間、学ぶ時間は必ずつくれる。この言葉を自分に言い聞かせて、これからも理数研授業研究会が活性化するように個人として、また幹事としても努力を絶やさぬようにしたい。